2020年12月20日発行

こ だ ま

10号
日本基督教団　若松教会
〒808-0053
北九州市若松区修多羅1-8-1
TEL：093-771-4329

大いなる喜び

茶屋明郎牧師

「いと高きところには、栄光、神にあれ、地には平和、御心にかなう人にあれ。」
（ルカによる福音書2章14節）

ホフェルト・フリンク　キリストの誕生を羊飼いに告げる天使たち　1639年　オランダ

救い主イエスの誕生のメッセージは、私たちすべての者に、大いなる喜びが実現することです。つまり、さまざまな不安や恐れから解放されて、平和な心、安らぎ、安心して生きる心が生まれ、豊かな大いなる喜びに満たされるということです。

主の天使が、大いなる喜びである救い主の誕生を、真っ先に、誰よりも早く告げ知らせたのは、羊飼いたちであり、その時、最初に出てきた言葉が、「恐れるな。」という力強い言葉でありましたが、この言葉が告げられたのは、彼らがさまざまなことで不安になり、恐れを抱いていたからに違いありません。

羊飼いたちは、具体的に、どんなことで悩み、苦しみ、絶望的な思いになっていたのでしょうか。

その一つが、羊飼いの仕事は、特別にしんどく、厳しく、過酷な労働であり、そのために、尊敬もされず、社会の底辺に置かれ、身分も地位も低く、差別や偏見を受け、人間としての尊厳さを見失い、自信を無くし、身を小さくし、見捨てられているような日々を過ごさざるを得なかったということかもしれません。

そして、羊飼いの働きは辛く、しんどく、過酷な労働の割には報酬は低く、貧しくありました。その貧困のために、さまざまな捧げものなどの、成すべき行いができずにいて、人々から罪人のレッテルを貼られ、裁かれるのではないかという不安や恐れの中で、悩み、苦しみ、絶望的な思いに打ち沈んでいたということかもしれません。

彼らは、天使からの「恐れるな。平和が生まれる。安心できる。大丈夫だ。」という力強い言葉にどんなに癒され、慰められ、励まされ、勇気づけられたことかと思います。

救い主イエスがもたらす救いが、どのようにして、彼らの不安や恐れを取り除くことができるのでしょうか。

救いは、イエスの十字架の死の出来事を通して示されているように、贖われ、赦され、あるがままで受け入れられ、神が共におられ、尊い、かけがえのない者として生かされることであり、愛と慈しみの生ける神が味方となって共におられ、支え、見守ってくださる恵みを通して、さまざまな苦難や危機に勝ち得て、余りある豊かな恵みに生かされ、苦しみや悲しみが小さくなり、感じなくなり、消えていき、その代わり、安心が生まれ、喜びが湧き、望みに生きることができるようになる。ですから、救いが大いなる喜びになるということです。

このことを証しているのが、星野富弘さんや水野源三さんたちであり、寝たきり状態という想像絶するような過酷な状態に置かれても、苦しみや悲しみを乗り越え、絶望に打ち勝ち、誰よりも喜びにあふれ、感謝にあふれて生きている、この人たちの姿です。

また、大いなる喜びであるのは、救いがすべての人において実現するということです。

どういうことかと言いますと、それは、救い主の誕生が真っ先に知らせられたのが、地位や身分が高い人達や裕福な人達ではなく、正しいと思われている人たちでもなく、そうではなく、社会の底辺で生き、弱い立場に置かれ、卑しい者として、罪人として差別や偏見を受けていた羊飼いたちであり、この世的な見方からすれば、神の恵みから遠く離れ、ふさわしくないと思われる人たちが、真っ先に伝えられる誉れを受けている事実によって、神の救いを受けられない人は誰もいないし、すべての人が神の救いに招かれていることが、どんなに確かであり、真実なことであるかが、明らかにされているからです。

救主御子の降誕を

一度も高らかに
クリスマスを喜び讃美歌を歌ったことがない
一度も声を出して
クリスマスを祝うあいさつをしたことがない
一度もカードに
メリークリスマスと書いたことがない
だけど　だけど
雪と風がたたく部屋で
心の中で歌い
自分自身にあいさつをし
とびたのうらに書き
救いの御子の降誕を
御神に感謝し喜び祈う

水野源三さんの詩集、がちゃぴん秀子の日記より

また、大きな喜びであるのは、喜びをもたらす救いを実現することが、神の御心であり、願いであり、神の働きであるからです。つまり、生きて働いておられる神が、私たちの不安や恐れを取り除き、安心して生きていくことを心から願い、働きかけをし、実現しようとしているからであり、ふさわしくない者をふさわしい者として受け入れて、人知を超えた平安を与えることができるのは、すべてを支配し、無から有を生じさせ、死んだ者に命を与えることができる真の神であり、創造主である生ける神であり、この救いは神にしかできないことであることを通して、神の栄光が表されている。だから、その救いの喜びが、どんなに真実であり、確かなことであり、真理なことであることが、示されているからです。

この救いの大いなる喜びが、私たちにおいて、時を超え、所を超えて実現するために、必要なことは、ただ信ずることであり、「恐れるな。」というメッセージが、私にも、私のような者にも、語られ、実現していくことを、心を低くして、謙虚になって、素直になって、畏れおののきつつ、受け入れていくことです。

死に至る病と闘っている少女が、恐れから解放されて、喜びと感謝を忘れずに病気に立ち向かい、死刑囚が処刑される時、恐れから解放され、讃美歌をうたい、祈り、笑みを浮かべながら、死に向き合うことができたような、素晴らしく、驚くべき生き方へ招こうとして、今、私たちにも、「恐れるな。」という力強い言葉が、投げかけられています。

スリランカ詣で

松本京子

最後にスリランカに行ったのが、2019年3月。500gの茶葉は167杯分だから、紅茶はとっくになくなってしまった。新型コロナウイルスのせいで、次のスリランカ行きは、いつなのか予想もできない。思い立って、今年の8月初めにバイオ・フーズ社に紅茶を発注し、今回は航空便で届いた。メールと手紙でいつもどおり友人たちに案内したら、紅茶15KG（30袋）は月末には完売。皆さんも待っていてくださったのだ。

カップに入れたストレートティを上から眺めた時、中心部の赤が濃く、だんだん外に向かって薄くなり、淵の方が金色に見える時がある、これがゴールデン・リング（金の輪）と言われるもの。丘陵地帯中部のキャンディ紅茶は、基本的にはミルクティ用ですが、ストレートティも美味しいので、この景色もお試しを。この幸運に遭遇するためには、マグカップではなく、内側が白いティカップがおすすめです。

久しぶりの紅茶を飲みながら、有機農法製の紅茶と出合ったキャンディ郊外ガラハの小さな農園の人々、そこからバイオフーズ社に繋がった人の輪、コロナの時代の夏は、スリランカの昔に浸る時間がたっぷりあった。

始まりはフォスター・プランだった。選ばれたのがスリランカの子ども、2歳にも満たない男の子だった。だから私のところに送られてくるのは、いつも村の人々の生活改善経過。当時は、チャイルドとペアレントが手紙を交換する、といういわば顔の見える支援がモットーだったので、毎回送られてくる現地スタッフのレポートには、少しく落胆していた。その幼児の写真もあった。息子を抱いている母親は、じっとカメラを見ている。写真を見る私に問いかけているような眼だった。

フォスター・プランの支援を決めたのは、1/10献金を実行していた母の影響でもある。専業主婦の母には収入がなかったので、彼女が管理する生活費からの1/10だったが。私がいわゆる不正規労働をしている時は見逃していてくれても、正規になった時には強く勧められた。

社会福祉の概念のない過去の教会では、献金は社会的弱者のためにも使われただろう。収入の一部を神様に捧げるというのはそういうことだ。でも、現在の教会が、そのような社会的活動にも献金を使っているかということには、とても懐疑的な気持ちだった。これから、私の収入の1/10は、献金と社会福祉にあてる、が話し合いの妥協点になった。

その支援の一つが、フォスター・プラン。そして、たまたまスリランカの子どもだった。東アジア人の目に比べて、南アジアの人々の目は大きい。眼力（めじから）も強力。子どもを抱いた母親の視線に気圧されて、支援は長くは続けられなかった。だからスリランカに行くことに。

1994年3月の夕方のこと、友人と私はホテルを発って空港に向かっていた。夕闇が迫りつつある大きな空の下、広い草原に一人の若い女性が、ポツンと座って通りを眺めていた。あんなところに、こんな時間に。一人でいることが丸見えではないの。危ない、危ない。女性たちが、幼い子どもや赤ん坊を連れて物乞いをする姿をコロンボでたくさん見た。路上で暮らす女性たちには、身を守るものが何もない。隣人、身の安全を守るドア、安らかな眠りを保証する寝床…。

友人と私は、これから飛行機に乗るところだ。国に帰れば家があり寝床がある。この違い。落差、不公平。神の義は？草むらに座っている女性に近づけば、息子を抱いていたあの母親と同様、「どうして、あなたたちが持っているものを私は持っていないの？」と彼女の目は、私に問いかけただろう。私は日本に生まれ、彼女たちはスリランカに生まれた。

2001年からスリランカに通うようになった経緯は、『こだま』1号に書いたとおり。この間もたくさんの出会いに恵まれ、スリランカの人々との多様なつながりが今与えられている。

「ただで受けたものだから、ただで与えなさい」（マタイ10：8）
イエスが、弟子たちを送り出した時のこの言葉の本当の意味を得るところが、スリランカなのだろう、と思う。スリランカ再訪の日が近いことを願っている。

月田・張遇聖　聖母子像　1954

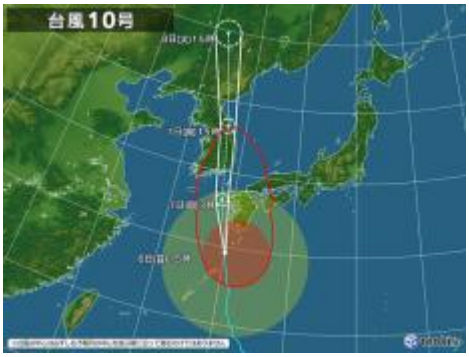
……

フォスター・プラン：　現在は、プラン・インターナショナルとして活動。「フォスター」とは「育てる」という意味。初めは戦災孤児の救済から、現在はアジア・アフリカ・中南米の貧しい子どもたちを支援。

この季節の中にいて

岩本旬子

皆様、こんにちは。
コロナ禍の中、ステイホーム、外出自粛と制限された生活の中、如何お過ごしでしょうか？
この生活がいつまで続くのか、まだまだ見通しがつきませんね。毎日しっかりと手洗い、うがい消毒をしているにも拘わらず、最近は感染が拡大している状況です。早くコロナのワクチンの開発が望まれる所です。
季節はめぐり、自然は確かですね。我庭の柿の実をようやく収穫し、干し柿にしました。甘夏の実も黄色に色づき、また、南天の実も赤く染まっています。大根と玉ネギの植付けも終わりました。この作業をしながら、季節の移りかわりを感じています。
季節は9月の事、台風10号が上陸し、ニュースは刻々と迫り来る台風に、「命を守る行動をとって下さい」と避難指示が流れました。我家は高台にある為、風の勢に緊張がありました。ホテルに避難しようと主人と私、ホテルに電話をした所、どこも満室です。北九州市以外、博多、別府にはありましたが――。
途方にくれていた中、「教会に避難しよう」と私が言うと、「教会に行こう」と同意した主人。早速、牧師に電話をして、「受け入れはどうですか？」と相談した所、「いいですよ、大丈夫ですよ」と言う返事がありました。一安心、ほっとした気持ちになりました。
避難準備に取り掛りました。雨戸のない窓という窓に、テープを十文字、✕印に貼り、また、段ボールで補強をし、その上からテープを貼り、また、玄関の鉢植え等を片づけ、準備万端。
その時、親戚から電話があり、「高台、大丈夫？うちにいらっしゃい」と声がかかりました。真に申し訳なかったのですが、牧師へお断わりの電話を入れ、親戚宅へ急ぎました。
この出来事は、我家の10大ニュースとなりました。後日、牧師から、「ご主人が教会に来て下さるという気持ちは嬉しかったですよ」とお聞きし、私も嬉しい思いが致しました。
一年が終わろうとしています。コロナにより世界が変わり、私達の生活、思い、考えも変わりました。茶屋牧師が言われた言葉が心にしみます。
「痛みがある時、忍耐の時、ただ淡々と礼拝を捧げよう」



台風10号の進路　tenki.jpより

まさか

三満田英子

ずい分昔、ある日の新聞に「火災の三件に一件は天ぷら油から！」という記事が載っていた。
「成程」と思いながらも「私に限って」と根拠のない思い込みをしていたら、その二、三日後、ふとした不注意で天ぷら油に火がつき、気づいた時には炎が天井めがけて立ち昇っていた。
とっさに手近にあったバスローブを鍋の中に投げ込み、大事には到らなかったが、物の見事に両手に大やけどをしてしまった。薬で黒くなった手を見ながら、己を訳もなく過信した浅はかさを悔やみ、「まさか」は身近でいつでも起こることだと実感させられた。

天ぷら油火災　埼玉西部消防組合

人は、悪いことはテレビや新聞で見聞きする事であって、無意識の内に自分には関係ないと思いがちだ。起こってほしくないことは、起こらないと勝手に思い込んでいる。
今、世界を席巻している天災や戦争、コロナなども、自分にはふりかからないと思うのではなく、ありえるかもしれないと覚悟して、「まさか」の時のための備えをすべきなのだろうと思う。

石鎚山行

二階堂裕

石鎚山の紅葉　石鎚ロープウェイより

「こだま」が発行される度、「NO MORE倭乱」の参加報告を投稿させて頂いていましたが、今年は、新型コロナウイルスの流行が始まったため中止となってしまいました。そして、「玉の会」（自由参加の山歩きが好きな方々の集まり）の打ち合わせも出来ない状況でしたが、田中先生の提案で、四国行を決定しました。

一週間前に、小文字山～足立山で足慣らしを行い（私は、途中の妙見にて折り返し）、石鎚も大丈夫との自信をつけての出発です。

参加者が、朱先生と田中先生、そして私の3名で、少し寂しい山歩きですが、10月の最後の日曜日、小倉港より松山行のフェリーに乗り込んで、船内で乾杯をし、就寝。翌日早朝、松山港をスタート。途中、朝食（うどん屋）を探したが見つからず、ジョイフルの朝食メニューで空腹を満たす。コンビニで昼食を調達し、久万高原より、石鎚スカイライン経由で土小屋へ。

6年前、同じメンバー＋1名（柳原氏）で、成就社コースからこの山に挑戦したので、今年は別ルートを選びました。

山道は整備が行き届いており、登り易かったのですが、6年の歳月を経て体力が衰えている事に加えて、昨年の病気による運動不足で、今年は山頂に立つことは叶いませんでした。

2人は、6年前に天候の関係で踏破出来なかった天狗岩（石鎚山頂）まで行く事が出来ました。それでも、年齢に応じた無理をしない速度で歩いて、行ける所まで行き、楽しむことが出来ました。紅葉を楽しみ、はるか彼方に瀬戸内海を望みながらの歩みでした。

これからも、時々近くの山（小文字、足立等）を楽しみたいと思います。なお、「玉の会」は何方でも参加できますので、ご一報下さい。

礼拝を守り続けて感じた事・変化

梅光学院大学　河野泰重

梅光学院大学　大学パンフレットより

僕は、高校の時まで、全くキリスト教というものに、縁もゆかりもありませんでした。強いて言えば、幼稚園がカトリック系でしたが、全く記憶がありません。

私が教会に来ようと思った理由は、僕の大学特有の授業であるキリスト教倫理の授業で、「地元の教会に行かなければならない」という課題が出ました。その時、私は、「どうしよう？」と悩みました。理由は、僕の大学が、キリスト教の中でも、プロテスタント系の大学でした。ですので、系列が違うと、礼拝のやり方などが違うからです。また、カトリック系では、礼拝の事をミサと言います。

なので、幼稚園の教会の礼拝は、あきらめました。そして、迷ったその時に見たのが、大学の教会案内です。そこに、日本基督教団若松教会が載っていました。ですので、「一回行ってみよう！」と思い、行きました。

その当日、教会に行けば、かなりの歓迎をされました。正直びっくりしました。そして、礼拝を受けて、「週一だし、教会の人は優しいから、続けようかな？」と思いました。

それから一か月を過ぎた時、大学の方から、「ミッション委員を募集します」というのが出ました。ミッション委員とは、宗教委員のことで、毎回の礼拝の運営、それから、サマリアデー献金を募るなど、キリスト教を守るための委員会です。そして、僕は、すぐにチューターの先生に連絡をして、ミッション委員会に入りました。

私が、ミッション委員になった理由は、毎週の主日礼拝を守っていて、茶屋牧師の宣教や讃美歌を歌っていて、「たのしいな」と思ったからです。だから、ミッション委員になりました。

それから、早くも半年以上が経とうとしています。礼拝を守り続けて僕が思ったことは、まずは、キリスト教に触れることが出来ました。礼拝を通して、色々なものを学ぶことが出来ました。また、ミッション委員という新たな挑戦をすることが出来ました。多分、礼拝に行かなければ、ミッション委員になっていなかったと思います。ですので、それだけ大きい出来事でした。また、礼拝を守り続けて、少しだけ丸くなった感じがします。

先日、友達に、こういうことを言いました。「みんなに幸せは、分けた方がいいしね！」。多分、礼拝を守っていなかったら、こんなふうには、なりませんでした。

今年は、ページェントも演じました。また、クリスマス礼拝で、歌うこともなかったと思います。これからも、礼拝を守り続けて、これからも、新たな挑戦して、成長していきたいです。

2020年度　教会の歩みと予定

4月　教会定期総会：6月に短縮して実施
5月　九州教区総会：書類開催、創立記念日礼拝：短縮
6月　ペンテコステ合同礼拝(於若松教会)：中止
7月　地区交換講壇：中止
8月　平和聖日・平和の集い：中止
10月　一日バス旅行(太刀洗方面)：中止
11月　逝去者記念礼拝：短縮、もなかバザー：中止
12月　アドヴェント・クリスマス諸行事：短縮
1月　新年礼拝(於若松教会)、地区信徒研修会：書類
2月　信教の自由を守る平和集会
3月　地区総会

2020年5月10日、創立130年記念礼拝

毎月の集会

- 聖書研究祈祷会（休会中）
- あも～るの会（第3日曜日礼拝後）
- 生と死を考える会（休会中）
- 若松キリスト教連合祈祷会（毎月）

2020年11月1日、逝去者記念礼拝

編集後記

筒井隆夫

今年は、コロナに始まり、コロナで終わろうとしております。「2020年度教会の歩みと予定」に記載した通り、様々な会議や行事が、簡略化され、中止されています。礼拝に来ることのできない教会員の方もおられ、礼拝者数も少なくなっています。その中で、河野君が、新たに礼拝に集うようになり、私たちも、元気付けられます。できることを、注意深く、コツコツと、ていねいに、やって行きたいと思います。